南アメリカの考古学史

—先コロンブス期文化の調査，研究史—

貞 末 堯 司

1. 序
2. スペインの征服とそれに続く時期（16～18世紀）
3. 19世紀の初頭から，その80年代頃まで
4. 19世紀の80年代以降から，20世紀の10年代頃まで
5. 第一次世界大戦以後，現在まで
6. むすび

1. 序

16世紀の初め，エルナン＝コルテスやフランシスコ＝ピサロによるアステカ王国やインカ帝国の征服が行われる以前の新大陸は，文字通り時代的には，先史時代であり，当時，ヨーロッパには，征服を通して，新大陸の様相が伝えられたに過ぎなかったのは，周知の通りである。新大陸の歴史は，このような事実をふまえると，征服という事件によって原住民の文化は終末をむかえ，原住民文化の復元は，この文化の終末を起点として遡らねばならないのである。このような観点から，考古学的調査，研究が，原住民文化の復元に大きな意味をもってくるのは当然である。つまり，新大陸においては，16世紀のスペイン侵入以前を先史時代として把握しても，考古学的資料の集積が，必要不可欠の学問的努力として要求されてくるのは当然である。このような努力が，南アメリカを中心とした地域に，何時頃から高まってきたのかについては，必ずしも明

確に，その時期を言うことができないが，南アメリカに関する考古学研究史は少くとも，四つの時期に区分して考えられるのが普通であろう。

勿論，南アメリカには，多くの国があり，国単位の考古学史も存在するわけであるが，南アメリカ全体として考えた場合，考古学史的には，目次に示めしたような，大凡四つの時期の大別が考えられるのではなかろうか。しかし，このような区分にも，なお多くの問題は残されているのであって，南北両アメリカ大陸を含んで，いわゆる新大陸の考古学史が，体系的に記述されたことにはならないのである。

しかし，ここでは，上記の四つの時期的な区分に従って論述を進めていきたいが，南アメリカでは，その考古学史を考えた場合に，一つの大きな前提となることがあることを理解しなければならない。それは，南アメリカの考古学はその学問研究の中心的地域に，ペルーという国があること，現在も，ペルーを中心とした考古学研究が盛んに行われているということである。つまり，南アメリカを総体的に把握して，その考古学史を考えていく場合にも，その中心的な学問的活動，研究成果等は，ペルーを中心としてなされたものであり，先史学の復元努力は，ペルーのアンデス地帯をその対象としたものであるといっても過言ではなかろう，ということである。このことは，南アメリカでは先史時代の文化領域が，アンデス地帯に集中し，ピサロの征服したインカ帝国の本拠地も，ペルーに存在したという事実が，古くからペルーに考古学研究の中心地をおかせたということに最大の原因があるのであって，南アメリカの考古学史の記述においては，必然的に，ペルーの考古学史的様相を帯びざるを得ないのである。換言すれば，南アメリカの考古学史の大半は，ペルーの考古学研究の歴史であり，その成果を記述するものである，ということである。

しかし，南アメリカの考古学史は，ペルーを中心として書かれるといっても20世紀の後半頃から，ラテン＝アメリカ諸国では，民族主義の興隆とともに，自国の歴史に対する強い関心がおこり，民族の歴史の基盤にあった文化，いわば，アメリカ原住民文化への興味と研究がおこってきたことも事実である。このことは，埋蔵文化財の保護運動とともに，科学的発掘，調査を通して，正確

な，過去の歴史の記録を後世に残こさんとする気運をかもし出し，強い文化財保護行政とともに，歴史研究の興隆をうながすことになったのである。このため，コロンビア，エクアドル，ボリビア，アルゼンチン，ブラジルなどの国々では，大学，博物館などに多くの蒐集品が集められ，これら研究機関を通して考古学研究が，ひじょうに盛んになってきているのである。例えば，エクアドルでは，新大陸の土器の発生地を求めての大規模な調査が行われ，また，アルゼンチンでは，広大なパンパの先史時代の調査が始まっている。このように，南アメリカの考古学史は，ペルーを中心としているとはいっても，構成する各国にも，大きな考古学の研究機関やプロジェクトがあり，これら調査の中にも秀れたものが数多くあることも忘れてはならない。

南アメリカの考古学史は，実際に筆をとってみるとひじょうにむずかしい仕事であることがわかった。しかし，久しく以前から考えていた新大陸での学問の系譜を歴史的に追求してみたかったことの一環として，敢て筆をとった次第である。大方の御批判，御叱正をお願いする次第である。

2. スペインの征服とそれに続く時期（16～18世紀）

1533年，フランシスコ＝ピサロによるインカ帝国の征服は，正に世界史の奇跡といわれるにふさわしいできごとであった。一瞬のうちに亡びたインカの歴史は，当時のカトリックの神父[1]やピサロの兵士[2]更には，征服後の植民地統治機構に参画した人達の記録によってしか判明しない。このような，いわゆる「年代記作者[3]」の残した，おびただしい記録，文献は，19世紀の後半になって，やっと出版され[4]，多くの人達の目にふれるようになったが，少なくとも，19世紀の終末頃までのアンデス史，特にインカについて知るためには，これら年代記作者の記録による以外方法はなかったのである。しかし，実際には，スペインの植民地支配の方針として，原住民に彼等の過去の歴史を知らせることは，厳重に禁止されたのである。18世紀に入って，アンデス地帯には，多くの反植民地反乱がおこっているが，これら反乱の精神的支柱をなしたものは，過去の歴史への賛美であり，スペイン支配を排して，過去の文明への復帰を希求

する運動でもあったといえよう。従って，スペイン本国及び植民地政府は，少なくともインカの歴史に関しては，本国の政策に有利な方向でのインカ史を宣伝し，教育しなければならなかった。

しかし，現実の政治上の教育政策とは裏はらに，インカに関する記録は，実際には年代記作者のものしかなかったので，1532年以後の記録によって，インカ史に対する教授が行われたようである。これは，インカ自体が，文字をもたなかったし，インカの公式記録に従事したとも考えられているキープ＝カマヨ（Quipucamayoc 結縄による年代記録者）はいたにしても，彼等の残したキープ（結縄）の解読は困難であって，年代記の中には，キープについて記録を残したものもあっても，アンデスの歴史，インカの歴史を明らかにするものではなかったのである。

このような点から，第一に注意されるのは，ペルーに実際に駐留した副王，フランシスコ＝デ＝トレド（Francisco de Tredo 1569年～1582年在位）によって書かれた『インカの歴史』である。彼は，インカの歴史を汚辱に満ちたものとして描き出した。例えば，インカの王は，皇位簒奪者であり，殺人を日常のこととした暴君であると記録しているが，これは，スペインの植民地支配を正統化するための一つの方策であった。このトレドの思想，考え方は，その忠実な下僕，サルミエント＝デ＝ガンボア（Sarmiento de Gamboa）にうけつがれた。彼は，トレドの考え方を更に発展させた『インカ史』を書いたのである。このトレドを祖とするトレド学派に対するものに，ガルシラソ＝デ＝ラ＝ベーガ（Garcilaso de la Vega）を代表とするガルシラソ学派がある。彼は，1540年，クスコに生れたが，父はスペインの名門の騎士，母は，インカ11代の皇帝，ワイナ＝カパック（Huayna Capac 1493年～1525年）の娘といわれている。彼の血の中には，インカ王室の血が流れ，インカ史の研究に，彼のほぼ全生涯が費されるが，20才の時，スペイン本国に留学したため，彼の『インカ史』の基本的資料の提供は，ブラス＝バレーラ（Blas Balera）からうけている。バレーラもスペイン兵士とインカ皇帝の縁続きの女との間に生れた混血児であったが，彼は，征服戦後，植民地支配のための教会の開設，学校の設置，インディ

オとスペイン人との間の通訳などで大きな活躍をした人物であった。彼は，アンデス地帯を広く旅行し，ケチュア語，アイマラ語ができたために，豊富な語学的知識を駆使して『ペルー史』『ペルーにおける歴史的語彙』『ペルー原住民の習慣とその崩壊』といった，現地踏査に基づいた克明な記録を残すこととなったのである。これらの著作は，ガルシラソ＝デ＝ラ＝ベーガの名著『インカ皇統記』の基本資料となったのである。ガルシラソ学派は，トレド学派と異なって，インカ帝国を賛美し，インカ皇帝は，トレド学派とは，正反対の仁君として描かれている。特に，両学派では，インカの建国伝説において，明確な相違が見られ，トレド学派は，インカの始祖，建国説話にも敵意と悪意に満ちた記述をしているのに対して，ガルシラソ学派は，好意的で，創造神，ヴィラコチャが，チチカカ湖畔で，インカの誕生を司ったなど，その伝説の中には，インカ皇統譜の神聖性を描き出そうと努めているのである[5)]。

このような，スペイン本国の政策が大きく反映した16世紀頃のクロニスタ（年代記作者）の記録には，硬軟両極端があって，ある面では，信用できない点も多い。しかし，ピサロの兵士として，征服戦に従軍した兵士の中で，シエサ＝デ＝レオン(Cieza de León) のペルーに関する記録は，アンデス地帯の研究誌としては，一等史料的価値をもつものであろう。レオンは，1548年，アンデス地帯のほぼ全域を旅行し，インカ帝国の歴史的背景，アンデスの地理，人々の習慣，考古学的，民族学的な調査などを実際に行って，自分の目や耳で確めたことを正確に記録していった。これは，1532年の征服から，約20年経った当時の生々しい記録であり，彼が，この旅行に基づいて著わした『ペルー誌』二巻は，正に不朽の名著といえよう[6)]。16世紀のクロニスタの記録と並んで考古学史上重要なものに，18世紀のカトリックの神父の活動とその記録がある。スペインの植民政策は，カトリックの布教とともに実行され，多くの神父が，新大陸に渡ってきて宗教活動に従事した。このような神父達の中で，トルヒィーヨの大司教になったバルタザール＝ハイメ＝マルティネッツ＝コンパーニィヨン(Baltsar Jaime Martînez Compañón) を忘れることはできない。彼は，自分の管区内の歴史について，深い研究と調査を行い，トルヒィーヨの近くにある，チ

ムー王国の首都であったチャン＝チャン（Chan Chan）の遺跡を調査した。彼の調査は，ペルーでの最初の層位的発掘ともいわれており，出土遺物の正確な層位が記録された上に，土器，文様，墳墓などが，正確な図とともに報告された[7]。これが一つの契機となって，その後，セロ＝タンタヤック（Cerro Tantalluc）遺跡も調査された。年代記作者の記録以上に彼の発掘調査は，18世紀を飾る考古学上の重要な作業であった。また，この頃，マラスピイナ（Malaspina）のペルーの太平洋岸の調査も忘れることができない。これは，その後，ホセ＝ドンベイ（José Dombey）のペルーの植物学的調査の基礎をつくり，彼等は，太平洋岸のチャンカイ谷の調査，パチャカマック（Pachacamac）遺跡，タルマ（Tarma）地方の調査を精力的に実行していったのである[8]。こうした，先駆的ともいえる人達の努力が基礎となって，アンデス地帯，特にペルーを中心とした地域の学術的調査の基礎が形成されていったのである。

3. 19世紀の初頭から，その80年代頃まで

この時期は，或る意味で，南アメリカにヨーロッパから多くの冒検家，旅行家，探検家とよばれる人達がやって来て，これらの人達が残した報告書や旅行記が，更に大きな発掘や調査へと発展する契機をつくってくれた時期だといえるであろう。

アリシデ＝ドルベニイ（Alcides d'Orbigny）は，自然博物学者として，民族学，言語学に大きな興味をもっていたが，アンデス地帯を調査するに及び，特に，ティアワナコ（Tiahuanaco）の壮大な遺跡を見るに及んで，ティアワナコの記念物の正確な実測図を残した人である。このことは，その後，ポスナンスキ（Arthur Posnansky）が，同遺跡を調査する上で，大きな契機を与えることとなったのである。また，リマのフランス総領事であったレオンシオ＝アングラン（Leoncio Angrand）のオヤンタイタンボ（Ollantaytambo）遺跡，ティアワナコ遺跡の正確な全景図は，その後の調査に大きな影響を与えるものであった。また，恐らく最初のペルー考古学者と考えられるマリノ＝エドワルド＝デ＝リベロ（Marino Eduardo de Rivero）は，1826年，現在のペルー国立博物館の基

礎を築いた第一人者であった[9]。しかも，インカのキープ（結縄）について発表した最初の人でもあった。また，彼は，テュシュデイ(Johann J. von Tschudi)と共同して，有名な『ペルー古代史』を出版した[10]。この出版は，その後の学問的報告書の一つの指針となったのである。また，クレメンツ＝ロバート＝マーカム（Clements Robert Markham）は，19世紀の偉大な先史学者の一人であるが，ペルー先史時代に関する労作も多い。しかし，彼は，英国におけるハックルート協会の責任者として『年代記』の英訳出版を行って，多くの年代記作者の著作を出版したことは，重要な意味をもつものであった。つまり，知られざる世界は，彼の努力によって，正確にその姿を現わしてきつつあった。しかも，彼は，年代記作者の記録の印刷，出版のみならず，年代記に自ら実証性を与えるために，広くアンデスを調査し，年代記の記述の裏付けを行ったことは，特筆すべきことであった。また，彼のインカ社会及びインカの精神文化についての研究は，その精密な挿図とともに，後世に与えた影響は大きいものがあった[11]。また，アメリカ合衆国の外交官として，ペルーに駐在した，E. G. スクワィア（Efraim G. Squier）は，1863年，ペルーやボリビアの多くの遺跡の実測図を作成した。特に，パチャカマの神殿，カネェーテ，チャン＝チャン，モチーカ（Mochica），ティアワナコなどの遺跡のグランドプランの実測図は，極めて正確なものであり，しかも，遺物は，実測図とともに写真を添付して報告された独得なものであった[12]。

19世紀の後半には，形質人類学的な研究もかなり進歩し，南アメリカの原住民文化は，その人達の骨格の研究や頭蓋骨の調査によっても追求されつつあった。このような時，T. J. ハッチンソン（Thomas J. Hutchinson）は，ペルーの各地の墳墓から発見された頭蓋骨，約150体をロンドンの中央研究所に送っている。このような，新しい角度からの研究を行った彼は，ペルーの考古学に新しい風を送り込んだことは確で，わずかな滞在にもかかわらず，彼が与えた影響も大きなものがあったといわねばならない[13]。また，このような過渡期にあって，偉大な足跡を残した人に，A. ライモンディ（Antonio Raimondi）がいるのを忘れてはならない。彼の名を冠して呼ばれるチャビン文化の代表的な石彫

「ライモンディ」は，現在，リマの国立博物館に収蔵されているが，これは，1872年の彼のチャビン＝デ＝ワンタル（Chavín de Huantar）遺跡の調査によって発見された。しかし，ライモンディの名を高からしめたのは，彼が，ペルーの多くの遺跡を調査しおえた後に出版した報告書の故であるといっても過言ではない[14,15]。

19世紀の後半における，ペルーを中心とした考古学史上で忘れることのできない人物を二名程あげることができよう。ひとりは，F. C. ヴィーナー(Francia Charles Wiener）であり，他は，M. J. デ＝ラ＝エスパーダ（Marcos Jiménez de la Espada）である。ヴィーナーは，オーストリア系のユダヤ人であったが，ブラジルに在住した博物学者として著名であった。彼は，ペルーを訪問した折に，ペルーの多くの遺跡を尋ね歩き，それら遺跡に関する報告書を発表した。これら遺跡の中には，アンコン（Ancón），パラモンガ（Paramonga），スーペ（Supe），カスマ（Casma）谷，ビルー（Virú）谷，カハマルカ（Cajamarca），ワマチュウコ（Huamachuco），チャビン，パチャカマックなど，現在でも考古学上の多くの問題点を提起している遺跡が含まれている。ライモンディの多くの報告書と並んで，ヴィーナーの遺跡についての報告と適確な認識は，現在のペルー考古学の基礎を築いたものの一つであったといっても過言ではないのである。また，エスパーダは，19世紀後半での大冒検家，或は博物学者として有名で，スペインの数少ないアメリカ学者の一人としても高名である。彼も，ペルーの考古学の基礎造りを行った人で，彼は，科学性を尊重し，非科学的な思いつきや実証されざる推論などは，極度に排して，科学的調査に大いに努力をした最初の人物ということができよう[16]。

4. 19世紀の80年代以降から，20世紀の10年代頃まで

この時期は，南アメリカ考古学にとっては，一時期を画するような業績や調査が現われ，偉大な学者の出現とともに，南アメリカ考古学が，近代化と科学性とをもって，しっかりしたその基盤を確立した時期であったといえよう。

勿論，この時期を明確な時間的経過においてとらえることはできないが，お

およそ，1880年以降から，1910年代の頃，つまり，第一次世界大戦が勃発する頃までが，この時期の終りと考えることができるようである。

南アメリカ考古学も，この時期を境として，ひじょうに変わってきたといえる。それは，考古学上の調査や発掘法が大きく変化し，特に発掘技術は，次第に精密さを要求されるようになるとともに，遺跡の全体像を把握するため，広大な地域の発掘が行われる必要がでてきたことであろう。従って，広い地域の全面的な発掘，調査のためには，多くの機械設備，器具を必要とするようになってきたことであろう。このような，いわゆる科学の時代は，考古学の分野においても，その方法の発展をもたらし，大規模化した発掘，調査が，いろいろな場所で行われるようになった。

アンデス地帯で，この時期に特筆される考古学上の調査は，エクアドルで行われた。カトリックの神父，F. G. スワーレス（Federico Gonzalez Suárez）は，エクアドルのアスアイ（Azuay），カルチ（Carchí），インバブラ（Imbabura）州の各地にわたって，広い範囲に考古学的調査を行い，エクアドル考古学の基礎を築いた。特に，彼が行った，アスアイ地方の古代灌漑施設に関する一連の歴史的研究は，特筆されるべきものであったが，これと並んで行われた，アンデス北部の調査も，エクアドルの古代文化の系譜を知る上に欠くことのできない研究であったのである[17]。

また，エクアドルのリオバンバ州出身の考古学者，J. F. プロアニョ（Juan Félix Proaño）の名をあげることができる。彼は，自分の出身地，リオバンバの考古学的調査を実行し，この地域の考古学上重要な遺跡について詳細な報告を行っている。勿論，スワーレスのエクアドルのほぼ全域に及ぶ研究に比べると，プロアニョの調査は，幾分見劣りがするが，北部アンデス地帯の考古学調査が，この時期に明確な形をとってきたことは，考古学史上，重要なできごとであった。また，エクアドルを中心として，この時期には，アメリカ人による考古学上の調査が行われたことも見逃すことができない。G. A. ドールセイ（George A. Dorsey）は，ラ＝プラタ（La Plata）島の考古学調査を行った最初の人として名高い。特に，同島のもつ考古学上の意義を深く解明し，エクア

ドルという地理上の特性をもった地域が，中，南米の古代文明の接点としての中間地帯的な意味をもつものとしての把握の仕方は，傾聴に値するものがあろう[18]。この調査によって，エクアドルの太平洋岸から約50kmの海上に浮ぶこの小さな島から多くの考古学上貴重な資料が得られ，同島のもつ意味が，知られるようになった。また，同じエクアドルでも，太平洋海岸地帯には，古くから特殊な人形土偶文化をもつ文化圏が存在していたことが知られていたが，エクアドルのこの太平洋海岸地帯に存在した特殊文化のマナビ(Manabi)，エスメラルダス(Esmeraldas) 文化に最初の調査を行った，M. H. サビイジェ (Marshall H. Saville) の名も忘れることはできない[19,20]。

エクアドルにおけるこの時期の大きな研究成果と相対するように，隣国，ペルーにおいても，ヨーロッパ人を主体とした多くの人達によって，考古学的調査の一大ページェントが開かれていた。

19世紀の末頃は，考古学的には，ひじょうに重要な時期で，世界的な考古学上の発見が相次いだ時期でもあった。例えば，ニネヴェの発掘やシュリーマンによるトロイ遺跡の発掘などが行われ，歴史学の分野では，考古学的発掘調査による資料は，文献史学に新しい息吹を吹き込むものとして，新しい歴史学の方法となりつつあった時である。特に，1880年代のドイツにおいては，ベルリン王立民族学博物館は，ヨーロッパにおける，アンデス地帯研究の中心地として，学問的にも重要な位置を占めていた。館長の A. バスチアン自身もアンデス古代文化の研究家であり，『古代アメリカの文化領域』という著作などによって，新大陸文化をヨーロッパに紹介したが，ベルリン王立民族学博物館から二人の人物が，ペルーに派遣され，古代アンデス地帯の科学的調査に従事した。この二人こそ，W. ライス(W. Reiss)と A. ステューベル (Alphonso Stübel) であった。彼等は，1880年から87年にかけて，ペルーのアンコン海岸で，貝塚を発掘したが，この調査の結果は，ペルーの古代文化史に新しい一ページを加えるものであった[21]。しかも，このアンコン貝塚の発掘では，科学的発掘といわれるように，層位的な観察は勿論のこと，遺物の描写においても，写真や実測図をのせ，優れた報告書であったため，その後の報告書の体裁をつくるもの

であった。

しかし，ペルーにおける考古学の基礎をつくり，アンデス考古学の基盤を築き，その発展のために生涯を捧げた人こそ，M. ウーレ（Max Uhle）であった。ウーレは，前述のスチューベルやライスとともにペルーでの考古学資料をもとに多くの報告を行っているが，彼が南アメリカの調査に実際におもむいたのは，1892年のことであり，それまでは，ベルリン王立民族学博物館の館員として，南アメリカで先輩達が蒐集した遺物の整理や研究に従事していた。彼は，アルゼンチンのブエノス＝アイレス港に上陸し，コルドバ市を中心とする同国の北西部地域の考古学的調査を皮切りに，ボリビアに向った。こうして彼は，1894年，ボリビアのラ＝パス市に到着し，さっそくティアワナコ遺跡をたずねた。ところが，遺跡の巨大な石像が，鉄道の標識に利用されているのを見て，彼は，ボリビア政府の文化財行政批判の新聞投書を行ってしまった。このため，彼には，ボリビア国内の発掘許可がおりないという事件がおこり，彼は失意のまま，1896年にペルーに向ったのである。この時，彼の資金援助をしていたのが，ペンシルベニア大学の理事であったコネリウス＝スチーブンス夫人であった。ペルーに到着した彼は，アンコン貝塚の一部を発掘したが，彼の考古学調査を最も有名にした，パチャカマック神殿の発掘にとりかかった。調査は，一年以上の歳月を費して行われ，彼は，1897年，パチャカマック神殿調査の報告書作成のため合衆国に向った。こうして1899年，報告書は完成し，再びペルーに引き返えして，すぐさま，チムー帝国の首都，チャン＝チャンとペルーの北部海岸地帯の中心，モチエ河谷の調査を行っている。この調査は，或る意味で重要な一面をもっていた。それは，彼のいう早期チムー（後に，モチーカとよばれるようになる）土器と後期チムー土器との間に，まったく，文化的な標識の異なった土器，つまり，ティアワナコ式土器に類似した土器が存在するという確信を彼に与えたからであった。この考え方は，彼が既にパチャカマックの神殿遺跡を発掘した時に，或る程度，確信に近いものになっていたのであったが，チャン＝チャンとモチエ河谷の調査は，三種の文化層の存在を層位的に明確に示すものであった。即ち，黒色土器（後期チムー土器）が一番上の層にあ

り，その下には，ティアワナコ式土器に類似した土器（ウーレは，アンデスの海岸地帯と山岳地帯とに発見されるこのティアワナコ的文化，土器をテイワナコイーデ，或はティワナコ＝エピゴン，つまり，ティアワナコ文化の後継者(エピゴン)と呼んだ）があり，一番下の層に，早期チムー土器（後にモチーカ土器）が発見されたのである。ウーレが「ティアワナコの後継者（エピゴン)」と呼んだ文化は，その後ペルーの先史時代にとって，重要な一つの文化層を示すものとなり，この「後継者」は20世紀に入ってから，ペルーの考古学者，J. C. テーヨによって，更に探求されていくことになり，いわば，ウーレによって，ペルーの考古学の編年の大要は形成され，それは，更に，その後の彼の学説の継承者やペルーの考古学研究者達によって発展されていったのである。

ウーレの南アメリカ考古学に果した役割や影響は，極めて大きなものであったが，彼の説は，前述の如く，ペルー考古学編年の大綱を決定する上に極めて大きな足跡を残したものであった。しかし，彼にも学説上の誤りがあったことは注意されなければならない。彼はペルーの中部海岸で，ティアワナコ＝エピゴンの更に下の層に，いわゆる「インター＝ロッキング」と呼ばれる土器の文化層と「赤地白彩土器」によって総括される一群の文化層との二つの文化層があることを発見した。彼は，この二つの文化層の編年的な位置付けに対して，チャンカイ谷やパチャカマック遺跡の最下層からの知見によって，この両文化はモチエ谷のモチーカ文化と同年代のものであるという確信をもっていた。この点についての彼の層位的な発掘の成果は，大いに学問的価値をもつものであったが，二つの文化層自体の先後関係で，彼の認識は，誤ったものであった。つまり，「インター＝ロッキング」文化層は，「赤地白彩」系文化層より古い時代のものであると考えたウーレの見解は，彼のその後の後継者達によって，逆の見解が出されて否定されることになった。今日では，赤地白彩系文化が古く，その次にインター＝ロッキング系文化が来ることが判明したのである。ペルー中部海岸地帯での彼のこの認識の誤りは，その後，多くの議論を重ねて修正されたものであったが，ウーレの考古学研究の成果は，更に，ペルーの南海岸にも広げられた。彼は，ここで，早期ナスカ土器を発見するのである。ナスカ

(Nazca) 土器の標本自体は，ベルリン王立民族学博物館に数点収蔵されていた。しかし当時，ナスカ土器の標本は，出土地不明のうえ，いつの時代のものか，まったくわからないままに放置されていた。しかし，ウーレのナスカ土器の調査によって，この文化も，ティアワナコ＝エピゴンとの関係の上で神秘のヴェールをはずすことになるのである。ウーレは，1905年，ペルー政府によって，国立博物館の考古学・民族学部長の席を与えられた。彼は，博物館の建物の建設や陳列品の収集に努力し，やがて館長に就任した。ここに，ウーレを頂点とするペルー考古学の研究者達の中核ができあがり，内，外の多くの学者，研究者が彼のもとで新しい考古学の研究に没頭した。その後，第一次，第二次大戦がおこり，ドイツ人である彼は，敵国人として監視されるという不遇に見舞われた時もあったが，1942年まで，リマ市の近郊に住んで，若い考古学者達との会合を唯一の楽しみにしていた。そして，敗戦の祖国ドイツに帰えった彼は，1944年，88才の生涯を，故国シレジアの町で閉じたのである[22]。

南アメリカの考古学史を語る時，マックス＝ウーレを忘れることはできない。また，ペルーというアンデスの中心部を占める国を度外視することもできない。従って，ウーレと彼がペルーに残した足跡を，冗長とも思えるくらいふり返えってみたが，ウーレは，ペルーのみならず，エクアドル，チリーにも大きな貢献をしたことを忘れてはならない[23,24,25]。

エクアドルでは，この時期に，J. J. y. カマーニョ (Jacinto Jijón y Caamaño) が，人類学や考古学の上で，大いに活躍しているが，彼は，ペルー滞在中のウーレをしばしば，エクアドルに招き，彼と一緒に考古学上の調査を行っている。ウーレがエクアドルで調査した場所は，ペルー同様，数えきれないが，その中でも，アスアイ (Azuay) 地方，トメバンバ (Tomebamba) 遺跡，クムバヤ (Cumbayá) 遺跡，エスメラルダス (Esmeraldas) 遺跡，クアスマル (Cuasmal) 遺跡，マンタ (Manta) 遺跡などが，有名である。しかし，彼のエクアドルでの調査に対しては，第二次大戦後，厳しい批判が行われた。即ち，エクアドル文化は，マヤ文明にその起源をもっているとする彼の説は，あまりにも現実を無視した説であり，ドイツ流考古学者の詭弁であるとしているのである。しか

し，彼の残した調査の足跡やその業績は，決して，そこなわれることはなかったのである。

ウーレがペルーで活躍を始める頃よりも少し前，ペルーにおいて考古学研究に従事していたドイツ人がいる。彼は，E. ミッデンドルフ（Ernest W. Middendorf）で，彼とウーレとは，対照的な人物として取扱われている。ミッデンドルフは，ペルー原住民の言語学的研究を主要テーマとしながら，ペルーの原住民文化に対する見解を三巻の著作にまとめた。また，彼の調査法は，層位学的な方法にもとづくものであって，チャビン遺跡の調査やパラモンガ城塞の調査など，極めて独得な調査法を使用したのである[26]。

また，ボリビアのティアワナコ文明及びペルーのインカ時代史に関しては，A. バンデディール（Adolfo Bandelier）と A. ベエセラー（Arthur Baessler）の二人を忘れることはできない。前者は，ティワナコ文明の研究に没頭し，1910年から翌年にかけて，ボリビアのチチカカ湖周辺の遺跡をふくんだ，ティアワナコ遺跡の報告書を出版している[27]。また，後者は，インカ文化史研究のための古代ペルー芸術の解明を行い，また，ミイラ製作技法など，ミイラの科学的な解明に先鞭をつけた。いずれも，20世紀初頭に行われた特筆すべき仕事であり[28]，古代アンデス文化も，このような人達の地道な努力が実って，次第にその全貌を現わしてくるのである。こうした多くの人達の南アメリカ考古学への貢献はいずれも考古学史上，忘れることのできないことばかりであるが，南アメリカの考古学研究にとって，最も実りの大きい，しかも発展的な時期を次に迎えることになるのである。

5. 第一次世界大戦以後，現在まで

マックス＝ウーレは，考古学研究の第一線から退いた後も，多くの学者，研究者に学問的影響を与えた。こうして，彼の学問的後継者として，ペルー人の学者，J. C. テーヨ（Julio C. Tello）とアメリカ合衆国の多くの人類学や考古学の学者達をあげることができよう。この中には，特に，人類学者，A. L. クローバー（Alfred L. Kroeber），W. C. ベネット（Wendell C. Bennett），W. D. ス

トロング (William Duncan Strong), J. B. バード (Junius B. Bird) など, 20世紀の南アメリカ考古学, それもアンデス地帯考古学を確立した人達をあげることができよう。

ウーレの後継者の中でも, 特にテーヨの業績は, アンデス考古学史上, 特筆されるべき性質のものである。テーヨは, ハーバード大学とベルリン大学で人類学を学び, 1913年以来, ペルーの国立博物館にあって, アンデス古代文化の研究に専念していた。彼は1919年以来, ペルーの山岳地帯の諸遺跡を調査し特に, チャビン＝デ＝ワンタル, カエホン＝デ＝ワイラス (Callejón de Huaylas) 及びワリ (Huari) の諸遺跡を調査するに及んで, ウーレのティアワナコ＝エピゴンが, 高原地帯にも広がっているのではないか, との想定をもつようになった。しかし, テーヨの最大の功績は, アンデス文明の源とも考えられ, アンデス文化の母体とも言われるチャビン文化の徹底的な究明をしたことであり, その分布を追求しながら, アンデス文明の本質に肉迫した彼の多くの著作をあげることができよう。

チャビン＝デ＝ワンタル遺跡は, 年代記作者のレオンが, 1550年に, 既におとずれており, 更には, 博物学者のヘンケが1790年におとずれていた。また, 1872年には, ライモンディが, 1886年には, ミッデンドルフが, この遺跡を調査するなど, 過去, 数世紀にわたって, 多くの研究者が, その神秘な高原文明の謎を解き明かそうと努力したところであった。テーヨは, チャビン遺跡を詳細に調査した後, この遺跡に, ひじょうに特徴的な石彫があることに注意をはらった。それは, 猫科獣の特長をもち, 神殿, その他の構造物の装飾として豊富に使用されていることであった。しかも, 石彫には, 牙や蛇のモチーフが多く, 特異な高地文化の特色をしめしている点が, 特に注目された。しかも, これらチャビン＝デ＝ワンタルの遺跡で発見される遺物と同一ないし同系統のモチーフをもつ石彫品及び黄金細工, 土器などは, 山岳地帯の広い範囲にわたって発見することができ, 海岸地帯にも同じような, モチーフや文化的標識が存在していることがわかってきた。こうして, テーヨは, 1933年, ネペンニャ河谷に二つのチャビン文化に属する遺跡を発見した。一つは, セロ＝ブランコ

(Cerro-Blanco) であり，他は，プンクリ (Punkri) という名の遺跡であった[29,30]。

この二つの遺跡は，テーヨにとっても，アンデス考古学の上からも忘れることのできないものとなった。それは，いずれも三つの時期の文化層によって形成されており，最下層には，石造りの建物があったが，この建物の壁は，表面を粘土で塗り固められており，チャビン文化と同じモチーフの文様が，彩色をもって描かれてあった。特にプンクリ遺跡の場合には，石製及び土製のチャビン式猫科獣神像が発見され，これが，チャビン期のものであることは，ほぼ間違いではないことが判明した。また，中間の層には，アドベ（日乾し煉瓦）で作られた構造物が存在していたが，アドベは，円錐形をしており，壁には，漆喰が塗られて，彩色文様が施こされていた。しかも，この層からは，土器の破片は一片も発見されなかったが，最下層と最上層からは，多くの土器が出土した。このような事実をつかんだテーヨは，チャビン文化の徹底的解明を誓い，チャビン文化の根拠地である，チャビン＝デ＝ワンタルの発掘を決意した。つまり，チャビン＝デ＝ワンタルを中心とした文化は，アンデス地帯にどのような範囲にわたって広がっているのか，そして，このチャビン文化から，何が生まれたのか，換言すれば，チャビン文化の次に現われる文化，つまり，古典期文化への移行形態が，発見できるかどうか，という困難な，未解決な問題を究明するために，彼はチャビン＝デ＝ワンタルの発掘を行ったのである。1934年，テーヨの手になる大発掘が行われ，これは，更に1940年と41年の二度にわたって追加発掘へと発展した。テーヨの主発掘が行われた数年後の1938年，W. C. ベネットは同じ，チャビン＝デ＝ワンタルを発掘した[31]。これら両者の発掘は，アンデスの高地に，ひじょうに古い時期に，アンデス文化の母体ともいえる高度文化が栄えていたことを実証した。猫科獣を信仰の対象とし，恐らく宗教上のセンターとしての機能をもったチャビン＝デ＝ワンタルには，多くの巡礼者達が各地からやってきたであろうし，彼等は，貢納物を捧げ，労働奉仕をして，この宗教上の中心地を守っていったであろう。チャビン文化は，こうして，アンデスの各地に散ばり，やがて次の大きな文明が発生するためのエネル

ギーとなったであろう。

テーヨ及びベネットのチャビン文化の追求は，多くの不明な点を残しながらも，チャビン文化の本質的な特質を浮彫りにした。そして，この文化は，実際に，何時頃，どのような範囲に広がっていったのか，その後，どうなっていったのかの探求が行われねばならなかった。テーヨは，このため，アンデスのほぼ全域を踏査し，ワヌコ市近郊のコトシュ（Kotosh），カスマ河谷のセロ＝セチン（Cerro Sechin），チチカカ湖北岸のプーノ市のプカラ（Pucara）遺跡などからチャビン文化の存在を確認した。

こうして，テーヨによるアンデス文化の起源を求めての考古学的調査は，チャビン文化の追求に始まり，多くの学問上の成果が得られて，今日なお多くの影響を学会に与えることとなった。しかし，テーヨのチャビン文化論には，もう一つの重要な結論がついていたことを忘れてはならない。それは，チャビン文化の担手の問題であった。彼は，アマゾンの東斜面の熱帯性降雨林に住む，ある種族（アラワク語族と推定をしている）によって，チャビン文化はつくられたと考えた。その理由としては，チャビン文化に特有な土器の器形や文様の施文方法などは，明かに木製道具の装飾技法と同じ手法によるもので，密林地帯に棲息している豹（Jaguar）は，彼等にとって，脅威と力の象徴であった。従って，豹に対する信仰がおこってきたのも当然であった。密林に居住する人種にとって，密林が非衛生的なものとなって，否，密林以外の地に衛生的で，生活上最適の場所が見つかったとすると，彼等は，そこへ移動したであろう。アマゾンの密林の中で居住していたある種族は，アンデスの高地帯，特に「モンターニャの眉毛」の地に登ってきて，そこで，とうもろこし農耕を営み，神殿を築き，猫科獣神の信仰を広めていったであろう，という推定を下したのである。勿論，彼の説が全面的に正しいとされる証拠があるわけではないが，彼のこの推定は，今日もなお，大きな影響力を後進に与えている。

前述のように，20世紀の前半の南アメリカの考古学にとって，忘れることのできないアメリカ人は，数多くいるが，特に，W. C. ベネットは，その一人である。彼は，テーヨとともに，チャビン文化研究の第一人者でもあったが，彼

はむしろ，ボリビアのティアワナコ遺跡の調査者としても著名である[32]。ティアワナコ遺跡に関しては，ティアワナコという名前の特殊性が問題になり，ケチュア語を語源とするのか，アイマラ語であるのか，また，インカ王室にだけ用いられた特殊な呼び名であったのかは不明である。しかし，この遺跡程多くの学者がその本質を究明せんとして集まった遺跡もなかったろう。特に，ウーレの「ティアワナコ＝エピゴン」問題の本源文化こそ，正にこのティアワナコであったのである。そして，ベネットは，文字通り謎を秘めたこの古代遺跡に，科学的方法による解明の手を下した最初の人となったのである。1931年と34年の2回の調査によって，ティアワナコは，宗教上の中心地であり，チャビン＝デ＝ワンタルと同じように，多くの巡礼者達が集ってきたであろう。こうして，彼等は，多くの労働を宗教的中心地であるこのティアワナコに捧げ，ベネットのいう「古典ティアワナコ文明」が形成された。巨大な石の彫刻品が作られ，広大な地域にわたって，太陽の神殿が形づくられていき，一大宗教的中心地が作られていった。しかし，この古典ティアワナコ文明は，突如としてアンデスの四方へと伝播を始め，アンデスのほぼ全域に，正に爆発的に，その文化的影響を広げていったのである。これが，いわゆる「ティアワナコイーデ（類ティアワナコ文化）」の問題となったのである。ベネットの調査によって，ティアワナコ文明の一応の編年がなされたが，ティアワナコ文明にとり組んだ人物が，もう一人いた。彼こそ，ティアワナコ文明の研究に一生を捧げた人であった。20世紀の初頭から約40年間，ティアワナコ文明の研究に没頭した人こそ，A. ポスナンスキー（Arthur Posnansky）その人であった[33]。彼は，ティアワナコ文化を五期に編年した。しかし，彼の五期編年の中には，今日の学問的水準から考えて，論理的に矛盾するものがあるといわねばならない。彼は，ティアワナコの自然環境は，現在とは異なって，温暖で，肥沃な耕地が広がり，快適な気候のもとで人々は生活していた。その理由は，アンデスのアルティプラノ（標高数千メートルの高原地帯）自体が，現在の標高より，低くかったためであると考えたが，アルティプラノの標高の高低の変化が，実際にあったとは，地質学上考えられない推論で，自然環境論からの彼のティアワナコ文明論

には，大きな無理があったのである[34]。

一方，ペルーの北部海岸文化に関しては，かねてから大きな関心が，内外の学者から寄せられていた。こうした一連のペルーの北部海岸文化の研究に大きな貢献をしたのが，W. D. ストロングであった。彼は，1946年，ビルー河谷の発掘を行い，トマバル（Tomabal）遺跡で重要な層位的発掘を行い，北部海岸地帯の文化的編年の本筋を把握した[35]。ウーレ以来，「ティアワナコ＝エピゴン」文化の問題は，ペルーの全域にわたっての大きな考古学上の問題であった。北部ペルーの文化編年では，この「エピゴン」文化は，早期チムー文化とチムー文化の中間に位置することが判明した。換言すれば，チムー帝国の領域に，その文化的領域が重なっていたモチーカ文化は，いかにも，チムー文化の先住者的色彩をもったもののように考えられてきたが，実は，モチーカ文化は，独自の古典的文化をもったもので，早期チムーの呼び名を改めて，モチーカ谷の名を冠して，モチーカ文化と呼ぶことが適当であると考えられるようになった。ストロングの集中的な調査と精力的な発掘作業は，モチーカ文明の様相を，はっきりと浮彫りにしていった。モチーカの人達は，全長 113km に及ぶ，網の目のような灌漑水路をつくり，農耕に依存した豊かな生活を送っていたと想像された。主たる栽培植物は，とうもろこし，豆類，落花生，ジャガイモ，かぼちゃ，チリモヤなど，多種類に及んだ。また，狩猟も行われ，網，投槍具，棍棒頭などが発見された。また，モチーカ人達は，草筏に乗って，太平洋岸での小規模な漁撈を行っていたと想像されている。ストロングの北海岸の調査は，カリフォルニア大学で，ウーレの蒐集品を，A. L. クレーバーとともに研究，整理したときの経験や知識が，大いに役に立っていたことも忘れてはならない。ストロングは，この時の知識を生かして，ペルーの南海岸文化にも探求の手をのばし，ワカ＝デル＝ロロ（Huaca del Roro）遺跡の発掘を行っている。テーヨによって発見された，パラカス＝ネクロポリス(Paracas Necropolis)遺跡の発掘とともに，ストロングのワカ＝デル＝ロロ遺跡の発掘は，後に南海岸の古典期文化の編年を行う上の根幹となった考古学上の重要な発掘であった。

また，J. B. バードの名も忘れることはできない。彼は，南アメリカにおける最古の農耕文化の遺跡を発見した。1946年，彼は，中央アンデスの海岸地帯チカマ河谷のワカ＝プリエッタ（Huaca Prieta）貝塚で，とうもろこしが認められない半農，半漁の文化を発見した。ここには，土器がなく，土器のかわりになる容器としては，ひょうたんが使用され，織物が織られ，豆類，かぼちゃなどが，極めて，小規模ながら栽培されていた様子が判明した。ひじょうに初源的な初期無土器農耕文化の遺跡が，初めてバードによって発見された。しかも，当時，年代測定の理化学的方法として，世界的な注目を集めた C^{14} 法が，この遺跡の資料に応用され，2348±230 B. C. という測定値を得たのである。このことは，アメリカ大陸の最古の農耕文化の様相を判明させるとともに，その出現の時期についての重要な資料を提供することとなった[36]。

この他，南アメリカの考古学にとって，20世紀の中頃以降から大きな調査団が組織され，学問的に輝かしい成果をいくつかあげてきた。このような人達の考古学史上の意義を述べる紙数がないため，名前だけでもあげておきたいと思う。フランス人の P. リベー（Paul Rivet），ドイツ人，W. レーマン（Walter Lehmann），H. U. デーリング（Heinrich Ubbelohde Doering），H. ディセルホフ（Hans Disselhoff）などであるが，日本からは，1960年以来，東京大学のアンデス地帯学術調査団が，故泉靖一教授を団長として，アンデスの東斜面に，コトシュ神殿遺跡を発掘調査し，アンデス地帯の宗教的中心が形成され，文明への母体が培われる段階での文化を解明したのは，アンデス考古学史上，特筆さるべき快挙であった。また，インカの陰れた都，マチュ＝ピチュ（Machu Pichu）の発見者，H. ビンガム（Hiram Bingham），インカ王道の研究者，V. W. von ハーゲン（Victor W. von Hagen），ナスカ砂漠の地上絵の研究に没頭した P. コソク（Paul Kosok）とその後継者，M. ライヘ（Maria Reiche），更には，コン＝ティキ（Kon-Tiki）号という筏にのって太平洋を西へ横断し4300マイルを航海して，西オセアニアのツァモトスに到着し，新大陸への民族の移動の可能性を実証しようとした，T. ハイエルダール（Thor Heyerdahl）など，南アメリカの考古学史に輝く人達は多く，その学問的業績は，極めて重いのであ

る。最後に，ペルーを中心とする南アメリカ考古学は，ペルー国内に多くの優秀な研究家を育成するとともに，現在，これら学者，研究者達によって，各地の調査が行われている。ペルー国内では，R. C. カッチョ (Rebeca Carión Cachot)，R. L. ホイーレ (Lafael Larco Hoyle)，J. C. ムィーエ (Jorge C. Muelle)，L. ルンブレラス (Luis Lumbreras)，F. K. ドイッヒ (Federico Kauffmann Doig)，T. M. セセペ (Toribio Mejía Xessepe) などの博士達の活躍によって，更に大きな発展が期待されている[37]。また，エクアドル，コロンビア，チリ，ボリビア，アルゼンチンなどの諸国においても，文化財保護政策とともに，考古学，人類学への興味と関心がおこり，研究所，大学を中心とした，組織的な研究が行われつつある。

6. むすび

ラテン＝アメリカの考古学史に関する文献や研究，発掘などの成果を集約した，年表，目録なども十分でない現在，南アメリカにおける考古学史を記述するのは，正直いって骨の折れる仕事であった。資料が不足しているうえに，色々な点で，正確な記述ができなくなるような基本的な文献や資料が不足している場合もあって，多くの考古学史上のできごとを割愛せざるを得なかったのは遺憾の極みであった。従って，比較的，よく資料が集められ，或る意味で，重要な考古学史上の研究，調査が集中的に行われた，ペルーに記述の中心がいったのは，如何ともなしがたいことであった。

南アメリカの考古学史は，序で述べた如く，ペルーに集中し，ペルーで書かれているといっても過言ではないくらいに，ペルーの考古学史と同じような性格をもっている。しかし，ラテン＝アメリカ構成諸国には，それぞれの国にそれぞれの歴史がある如く，その国には，その国独自の学問的系譜がなければならない。例えば，エクアドルやアルゼンチンにおいても，自国の過去の歴史に対する探求は，ひじょうに強いものがあり，エクアドルのキトー国立中央大学の考古学研究室や同付属民族学博物館では，北部アンデスの総合的調査を行うとともに，発掘品や蒐集品をできるだけ多く，中央に集めて，古代文化の体系

的な復元作業を行っている。また，アルゼンチンのラ＝プラタ博物館には，莫大な先史時代資料がある。これら資料は，広大なパンパスの先史時代を物語っているものも多い。しかし，南アメリカのこれら資料は，まだ，日本にいてすぐに利用できるまでには，いたっていない。つまり，出版文化の立おくれは多くの資料を山積みにするだけで終ってしまいそうである。文化的な交流や個人的な交信はあっても，十分にかつ徹底した資料の利用ができる段階は，まだ遠い将来のようである。

南アメリカ考古学史の記述，これは，日本においては，誰も行ったことのない仕事である。逆にいえば，資料不足のこのようなことは，誰もやらないのが当然であるかもしれない。それだけに，本記述は，「暴虎馮河」のそしりをまぬがれないと思う。将来を期したいと願うだけである。

〔注〕

1) ピサロが，ペルーの征服を行った時に，彼に従軍した神父はヴァルベルデであり，インカ皇帝アタワルパを改宗させている。この他，ホセ＝デ＝アコスタ神父などが有名である。

2) 最も有名な兵士は，シエサ＝デ＝レオンであるが，この他，ファン＝デ＝ベタンソスなどがいた。

3) このような人達を「クロニスタ」と呼んでいる。

4) 『年代記』の英訳出版を行ったのが，有名なハックルート協会（Hakluyt Society）であり，その責任者がクレメンツ，R. マーカム卿であった。

5) クロニスタの記録を一つ一つあげておく余裕がないので，ここでは，Prescott, William. Hickling: *History of the Conquest of Peru.* 1847 と *The Conquest of Mexico and The Conquest of Peru.* New York.
Markham, C. R.: *Reports on the Discovery of Peru.* Hakluyt Society No. 47. 1872. London. *Rites and Laws of Incas.* Hakluyt Society, No. 48. 1873. London. をあげておく。

6) Cieza de León, P. de.: *The Second Part of the Chronicle of Peru. Translated and edited by C. R. Markham.* Hakluyt Society No. 68. 1883. London.

7) Jiménez de la Espada, M.: *Sobre Martinez Compañón.* Actas del IV Congreso de Internacional de Americanistas, 1881. Madrid. 1883. Madrid.

8) Porras, B. R.: *Fuentes Historicas peruanas,* 1954. Lima.

9) Alcina, Franch José: *Manual de Arqueologia Americana,* pp. 30—58. 1965, Madrid.

10) Rivero, M. E. and J. J. Tschudi: *Antigüedades peruanas,* 1851. Wien.

11) Markham, C. R.: *The Incas of Peru,* 1910. London and New York.

12) Devel, L.: *Conquistadors without Swords,* pp. 16—34. 1974. New York.

13) Hutchinson, Th. J.: *Two years in Perú with Exploration of its antiquities,* 1873. London.

14) Raimondi, A.: *El Perú,* 1874. New York.

15) Doig, F. K.: *Arqueologia peruana,* 1971. Lima.

16) Alcina, F. J.: op. cit. pp. 38—39. 1965.

17) González Suárez, Monseñor, F.: *Estudios historicos sobre los Cañaris, antiguos habitantes de la provincia del Azuay, en la República de Ecuador,* 1878. Quito.

18) Dorsey, G. A.: *Archaeological Investigations on the Island of La Plata.* Field Museum of Natural History. Anthropological Series, Vol. 2, No. 5, 1901, Chicago.

19) Saville, M. H.: *The Antiquities of Manabi, Ecuador,* 2 vols, 1907—10. New York.

20) Saville, M. H.: *Archaeological researches on the coast of Esmeraldas,* Ecuador XVI International Congress of Americanist, 1910. Wien.

21) Stübel, A. and W. Reiss: *Das Todtenfeld von Ancon in Perú,* 3 vols, 1880—87. Berlin.

22) Doig, F. K.: op. cit. pp. 85—87. 1971.

23) Uhle, M.: *Las ruinas de Tomebamba,* 1923. Quito.

24) Uhle, M.: *Las antiguas civilizaciones esmeraldeñas.* Anales de la Universidad Central, Vol. 38. 1927. Quito.

25) ウーレの著作に関しては，ペルーの遺跡に関するものとエクアドルの遺跡に関するものとひじょうに数が多いため，ここでは上記二種類をあげておく。

26) Doig, F. K.: op. cit. pp. 83—4.

27) Bandelier, A.: *The Ruins at Tiahuanaco,* 1911. New York.

28) Baessler, A.: *Peruanischen Mumien* 1906, Berlin.

29) Tello, J. C.: *Discovery of the Chavín Culture in Perú,* American Antiquity,

Vol. 9, pp. 135—60. 1943. Salt Lake City.

30) なお，テーヨの著作もウーレと同様に莫大な数にのぼり，しかも，それらが，相互に関係をもつ部分があるので，全部をあげることはできない。従って，注29)のものは，チャビン文化に対するテーヨの基本的な考え方と認識の仕方を述べた彼の円熟期の著作だけに，ここに参考としてあげておく。

31) Bennett, W. C.: *The Position of Chavín in Andean Sequences,* Proceedings of the American Philosophical Society, Vol. 86, No. 2. pp. 323—7. 1943. Philadelphia.

32) Bennett, W. C.: *Excavations at Tiahuanaco,* Anthropological Papers, American Museum of Natural History Vol. 34. pp. 359—494. 1934. New York.

33) Posnansky, A.: *Tihuanacu, The Cradle of American Man*, 2 vols. 1946. New York.

34) Posnansky, A.: *Tiahuauacu y la civilización Prehistórica en el altiplano andino,* 1911. La. Paz.

35) Strong, W. D.: *Cultural Epochs and Refuse Stratigraphy in Peruvian Archaeology,* In Bennett(ed) 1948. pp. 93—102. *in* A Reappreisal of Peruvian Archaeology, Memoir 4. Society for American Archaeology, Menasha.

36) Bird, J. B.: *Preceramic Cultures in Chicama and Virú,* in Bennett (ed) 1948, pp. 21—8 *in* A Reappraisal of Peruvian Archaeology Memoir 4 Society for American Archaeology Menasha.

37) Doig, F. K.: op. cit. pp. 77—89.